

[I] イザヤ i~xxxix	C. イザヤの隠退 (viii:16~18)	2. エジプトの運命 (xix:1-15)	1. 神の恵みの学び教訓 (1-13)
I. 彼らは私に背いた (i~v)		3. エジプトへの脅迫 (xix:16-17)	2. 死との契約 (14-22)
A. 表題 (i:1)	III. 外患は去らず (viii:19~x:4)	4. エジプトとアッシリアとの主権争い (18-25)	B. 農夫のたとえ (xxiii:23-29)
B. 託宣の書 (i:2~ii:5)	A. 不吉な予言の二片 (viii:19~22)	5. エジプトに對する予言 (xx)	C. 神の驚くべき業 (xxix:1-14)
1. イスラエルの忘恩 (i:2~3)	B. メシヤ王 (ix:1~7)	J. バビロン崩壊の予言 (xxi:1-10)	1. バビロンの患難と救済 (1-8)
2. シオンの捕らえられた王 (i:4~9)	1. 橋渡しの文 (ix:1)	K. エドムへの脅迫 (xxi:11-12)	2. 神の言の首目の理由 (9-12)
3. 神の最大関心 (i:10~17)	2. メシヤ予言 (ix:2~7)	L. デタンとテタルの運命 (xxi:13-17)	3. 懐疑的宗教の廃棄 (13-14)
4. 悔改めが滅び (i:18~20)	*C. エフサイの審判とゴダの教訓 (ix:8-x:4)	M. 災い前夜の酒宴 (xxii:1-14)	D. 信仰的安らぎの拒否 (xxix:15-xxx:17)
5. エルサレム哀歌 (i:21~23)		N. 執事セブタの失脚 (xxii:15-25)	1. 陰謀吐露 (xxix:15-16)
6. 主の審判 (i:24~26)	IV. アッシリアを恐れた王 (x:5~xii:6)	O. ユダへの脅迫 (xxiii)	2. 二つの終末論的補足 (xxix:17-24)
7. 付録 (i:27~31)	A. アッシリアの脅威 (x:5~34)	1. ユダとシドンの運命 (1-14)	3. エジプトへの不吉な使者 (xxx:1-7)
B. シオンの神への諸國復帰 (ii:1~5)	1. アッシリアの高まり (5~16)	2. 70年後のユダ再興 (15-18)	4. 罪と証し (xxx:8-17)
G. 主の日 (ii:6~22)	2. 林の火 (17~19)		E. 皇太子の神の力 (xxx:18~xxxi)
1. 偶像礼拝の運命 (ii:6-11, 18-22)	3. 残りの者 (20~23)	VI. 神に伏す者よ、まめに歌え (xxiv~xxvii)	1. 逆境にありし者の約束 (xxx:18-26)
2. 人間的誇りの辱しめ (ii:12~17)	4. シオン激励 (24~27c)	A. 第一サイクル (xxiv)	2. 主の怒りの嵐に對する救済 (xxx:27-33)
D. 支配者の運命 (iii:1~15)	5. 侵略者接近 (27d~32)	1. 罪ゆえに荒れた地 (1-12)	3. 軍隊の力、御霊の力 (xxxi:1-3)
1. 社会の無秩序 (1~7)	6. 林の辱しめ (33~34)	2. 勝利の声 (13-16a)	4. エルサレムの守護神 (xxxi:4-9)
2. 滅びの民 (8~12)	B. メシヤの時代 (xi)	3. 主の恐れ (16b-18b)	F. 付録 (xxxii)
3. 支配者の強欲 (13~15)	1. ゴビデアのメシヤ (1-9)	4. 最後の破局 (18c-23)	1. 支配者の正義と社会の知恵 (1-8)
E. エルサレムの寡婦人 (iii:16~iv:1)	2. メシヤとイスラエル回復 (10~16)	B. 第二サイクル (xxv:1-9)	2. 思ひ煩めぬ女への警告 (9-14)
F. 清められたシオン (iv:2~6)	C. 感謝 (xii)	1. 勝利の感謝 (1-5)	3. 来るべき世の御霊の賜物 (15-20)
G. 主のぶどう畑の歌 (v:1~7)		2. 勝利の酒宴 (6-9)	
H. 神も人も恐れぬ者 (v:8~24a)	V. 多くの年のさわめき (xiii~xxiii)	C. 第三サイクル (xxv:10~xxvii:1)	VIII. 主の報い (xxxiii~xxxv)
I. エフサイの審判とゴダの教訓 (v:24b~30)	A. バビロンの運命 (xiii)	1. エフサイの運命 (xxv:10~12)	A. 懇願祈禱文 (xxxiii)
	B. 暴君倒れる (xiv:1~23)	2. 勝利の賛歌 (xxvi:1-6)	1. 第一楽章 (1-6)
II. 証を封じよ (vi~viii:18)	C. アッシリア滅亡の神意 (xiv:24~27)	3. 信託と信仰との争い (xxvi:7-9)	2. 第二楽章 (7-16)
A. 神の告げ (vi)	D. アッシリアの争ひを喜び (xiv:28~32)	4. レビタン虐殺 (xxvi:20-xxvii:1)	3. 結句: 約束の言葉 (17-24)
B. シリア-エフサイ戦 (vii~viii:15)	E. エフサイの致命傷 (xv~xvi)	D. 第四サイクル (xxvii:2-13)	B. 神の痛みの恐ろしい末路 (xxxiv)
1. シルヤとエフサイの戦 (vii:1~9)	F. シリア-エフサイ同盟の運命 (xvii:1~6)	1. 主のぶどう園 (2~6)	C. 変容の世界とシオンの復帰 (xxxv)
2. イスラエルの戦 (vii:10~17)	G. 偶像礼拝 (xvii:7~11)	2. イスラエル受難の意味 (7~11)	
3. 来たべき再興 (vii:18~25)	1. 偶像の立ち帰り (7~8)	3. 十字架の日 (12-13)	IX. イザヤとヒゼキヤ物語 (xxxvi~xxxix)
4. マル・シラ・ハシ・バスの戦 (viii:1-4)	2. アトニス像代、シオンの守り (9~11)		A. エフサイのエルサレム明滅請求 (xxxvi-xxxvii:4c)
5. 二つの託宣 (viii:5~8a)	H. 哀し (xvii:12~14)	VII. 嘲諷、マセカと盲目の王の争い (xxviii~xxxii)	B. エフサイの運命予言 (xxxvii:4d-7)
6. 信仰による挑戦 (viii:8b~10)	I. エジプトに對して (xviii~xx)		C. 脅迫状とヒゼキヤの祈り (8-20)
7. 人の恐れと神の恐れ (viii:11~15)	1. クシオの使者への回答 (xviii)	A. 首の擧げ祈り (xxviii:1~22)	D. イザヤの反叛予言 (22-29)

E. 残りの者の命 (30-32)	2. 第一詩連: 諸國の光 (6-9)	4. 第四詩連: 木工 (13)	2. 第一詩連: 先の事 (3-5)
F. 七ツツの途却り言 (21. 33-35)	3. 第二詩連: 見よ新しい歌 (10-13)	5. 第五詩連: 天木と地の木 (14-15)	3. 第二詩連: 新しい事 (6-8)
G. アツリ中撃破 (36-38)	4. 第三詩連: 主の介入 (14-17)	6. 第六詩連: 剣物と神 (16-17)	4. 第四詩連: 私のために (9-11)
H. ヒモキアの痛気と回復 (XXXVIII)	E. 見よ木と音目と煙のせい (XII: 18-XIII: 7)	7. 第七詩連: 偶像と死者の音目 (18-20)	5. 第五詩連: 初めと終わり (12-13)
I. XODクハラダンの使者 (XXXIX)	1. 序曲: 主は許す (XII: 18)	H' (XIV: 21-23)	6. 第六詩連: クラスの使命 (14-15)
	2. 第一詩連: 音目のせい (19-21)	1. 第四詩連: 二重王座と主 (21)	7. 第七詩連: 道の指導者 (16-17)
[II] イザヤ XI~V (イ=イザヤ)	3. 第二詩連: 天と地のせい (22)	2. 第五詩連: 赦しと悔改め (22)	8. 第八詩連: 船底の報い (18-19)
I. 神の直心と東極 (XI~XVIII)	4. 第三詩連: 捕囚のイスラエル (23-24)	3. 第六詩連: 主はイスラエルを救はれた (23)	9. 第九詩連: 抒情詩 (20-22)
A. 主の東極 (XI: 1-11)	5. 第四詩連: 審判の火 (25)	J. クラスの油注ぎ (XIV: 24~XV: 13)	
1. 序曲 (1-2)	6. 第五詩連: 審判の彼方の恵み (XIII: 1-3b)	1. 第一詩連: クラスに与る主の目的 (XIV: 24-25)	II. イスラエルの見よ (XIX~V)
2. 第一詩連: 主の道 (3-5)	7. 第六詩連: イスラエルの見よ (3c-5d)	2. 第二詩連: クラスの任務 (XV: 1-7)	A. 主の僕: 使命・任務・慰め (XIX)
3. 第二詩連: 主の言 (6-8)	8. 第七詩連: 離散民の帰国 (5b-7)	3. 抒情詩の向奏曲: 天地を救はせよ (8)	1. 第一詩連: 僕の使命・使命・運命 (1-3)
4. 第三詩連: 汝の神を見よ (9-10)	F. 天と地とイスラエル (XIII: 8-13)	4. 第三詩連: 自然と歴史の主の主権 (9-13)	2. 第二詩連: 僕の報いと誉れ (4-5 ef)
5. 結: 牧者及び従服者 (11)	1. 序曲: 主はB喚 (8)	K. 諸國の回心 (XIV: 14-25)	3. 第三詩連: 諸國の光 (5abcd, 6)
B. 地の果ての創造者 (XI: 12-31)	2. 第一詩連: 歴史の論争 (9)	1. 第一詩連: 諸國の告白 (14-15)	4. 第四詩連: 諸國の表敬 (7)
1. 第一詩連: 誰が宇宙を創造したか (12)	3. 第二詩連: 主の証言とせい (10)	2. 第二詩連: 偶像制作者混沌とイスラエルの救 (16-17)	5. 第五詩連: 地と民の回復 (8-9b)
2. 第二詩連: 創造神の助けは誰か (13-14)	4. 第三詩連: 天の神、汝は証人 (11-12)	3. 第三詩連: イスラエルの主の啓示 (18-19)	6. 第六詩連: 新出エジプトと離散民帰国 (9c-11)
3. 第三詩連: 諸國の神の前に無 (15-17)	G. 恵みに与る見よ (XIII: 14-XIV: 5)	4. 第四詩連: 神々は敗れた (20-21)	7. 感謝の歌: 主は民を慰められた (13)
4. 第四詩連: 偶像は動けぬ (18-20)	1. 第一詩連: 離散民の解放 (XIII: 14-15)	5. 第五詩連: 天と地は主 (22-23)	8. 第七詩連: 主は天に忘れず (14-16)
5. 第五詩連: 自然と歴史の主 (21-24)	2. 第二詩連: 海を救い (16-17)	6. 第六詩連: 世界的な告白 (24-25)	9. 第八詩連: 栄光の帰定 (18, 12)
6. 第六詩連: 比類なき主 (25-27)	3. 第三詩連: 天は新しい事と主 (XIII: 18-19)	L. 神の崩壊と天と地のせい (XVI)	10. 第九詩連: 再興の歌 (17, 19)
7. 第七詩連: 永遠の神 (28-31)	4. 第四詩連: 荒野中の流れ (20-21)	1. 第一詩連: バビロンの神の無力 (1-2)	11. 第十詩連: 二人はどこの (20-21)
C. 諸國の音目 (XII: 1-4)	5. 第五詩連: 天と地の証言 (22-24)	2. 第二詩連: 天と地は主の僕 (3-4)	12. 第十一詩連: 國々の旗 (22-23)
1. 名喚 (XII: 1)	6. 第六詩連: 恵みと審判 (25-28)	3. 第三詩連: 天と地の神と主 (5-7)	13. 第十二詩連: 救主・見よ主・天の全能者 (24-26)
2. 第一詩連: 歴史の証言 (2-4)	7. 第七詩連: イスラエルは恐るべき (XIV: 1-2)	4. 第四詩連: 歴史の唯一の主 (8-11)	B. 悔改めぬ民と告白の僕 (1)
3. 第二詩連: 諸國の偶像に頼る (5-7)	8. 第八詩連: 水と御霊 (3-4)	5. 第五詩連: 地を救い (12-13)	1. 第一詩連: 神の審判と契約的恩恵 (1-3)
4. 第三詩連: かが僕イスラエル (8-10)	9. 第九詩連: 契約民の新帰依者 (5)	M. バビロンの少女への嘲笑歌 (XVII)	2. 第二詩連: 主の弟子の受難 (4-6)
5. 第四詩連: 諸國の審判 (11-13)	H. イスラエルに天の主の光 (XIV: 6-8)	1. 第一詩連: 王座喪失のバビロン (1-4)	3. 第三詩連: 天の御子・保護者 (7-9)
6. 第五詩連: 打殺神のせいイスラエル (14-16)	1. 第一詩連: 王座喪失の主 (6)	2. 第二詩連: バビロンの高ボリ人の審判 (5-7)	4. 第四詩連: 信仰の光と天の火 (10-11)
7. 第六詩連: 抒情詩の向奏曲 (17-20)	2. 第二詩連: 歴史と主の神 (7)	3. 第三詩連: バビロンの奇蹟は崩壊 (8-9)	C. 天と地は救い (II: 1-16)
8. 第七詩連: 再び歴史の証言 (21-24)	3. 第三詩連: 主のみ歴史の神 (8) *	4. 第四詩連: 奇蹟の災難 (10-11)	1. 第一詩連: 天の御子 (1-3)
9. 第八詩連: 再び諸國の審判 (25-29)	I. 偶像制作者の風刺詩 (XIV: 9-20)	5. 第五詩連: 奇蹟のせい (12-13)	2. 第二詩連: 救いの時は近い (4-6)
10. 第九詩連: 主の使命 (XII: 1-4)	1. 第一詩連: 偶像制作者の恵み (9)	6. 第六詩連: 火のせい (14-15)	3. 第三詩連: 天と地、主 (7-8)
D. 神の介入の新しい出来事 (XII: 5-17)	2. 第二詩連: 偶像制作者の審判 (10-11)	N. 歴史と預言 (XVIII)	4. 終末論の向奏曲: 神の介入の熱烈な叫び (9-11)
1. 序言的証言 (5)	3. 第三詩連: 全段の恵み (12)	1. 第一詩連: 呼びかけ (1-2)	5. 第四詩連: イスラエルの慰め (12-14)

6. 六詩連: 創造神は契約の主 (15~16) D. 予言者エゼキヤス (li: 17~ii: 12)	4. 四詩連: 外国人 (6~7) 5. 結: 集められた神の共同体 (8)	4. 四詩連: 西オシの葡萄の繁栄 (8~9) 5. 五詩連: 諸國の恵と富の回復 (10~12)	4. 四詩連: 神の民全体に減ばす (8~10) 5. 五詩連: 普信者への減 (11~12)
1. 一詩連: 神の響きの杯 (li: 17~18) 2. 二詩連: エルサレムの破壊状態 (li: 19~20) 3. 三詩連: 怒りの杯 (li: 21~23)	B. 盲目な指導者と痛めた礼拝 (vi: 9~vii: 13) 1. 一詩連: 指導者の腐敗 (vi: 9~10) 2. 二詩連: 貪欲な犬 (11~12) 3. 三詩連: 義人の運命 (vii: 1~2) 4. 四詩連: 普信者叱責 (3~4) 5. 五詩連: 自然崇拜帰依者 (5~6) 6. 六詩連: 自然崇拜の生涯 (7~8) 7. 七詩連: 果てなき禁戒の努力 (9~10) 8. 八詩連: 主の管轄状 (11) 9. 九詩連: 神の運命と主の恵み (12~13)	6. 六詩連: 神殿再建 (13~14) 7. 七詩連: 永遠の都 (15~16) 8. 八詩連: 新エルサレムの繁栄 (17~18) 9. 九詩連: シオンの光たる神 (19~20) 10. 十詩連: 新時代の新しい民 (21~22) G. シオンの救いの福音 (xi)	6. 六詩連: 主の嘆息と普信者たち (13~14) 7. 七詩連: 新しい名と新しい祝福 (15~16) 8. 八詩連: 新創造と新しい時代 (17~19) 9. 九詩連: キリスト的社会的な生活 (20~23) 10. 十詩連: 平和の時代 (24~25)
5. 挿入: 代価なし (li: 3~6) 6. 六詩連: 汝の神は王となつた (lii: 7~8) 7. 七詩連: 怒め、騒い、勝利 (lii: 9~10) 8. 結: 新しい出エジプト (lii: 11~12)	E. 愛憎の道のしるし (lii: 13~liii: 13) 1. 一詩連: 僕の精進の成功 (lii: 13~15) 2. 二詩連: 僕の愛憎の生涯 (liii: 1~3) 3. 三詩連: 我がオエエの愛憎 (4~6) 4. 四詩連: 沈黙の愛憎死 (7~9) 5. 五詩連: 主の目的と僕の定め (10~12)	9. 九詩連: 新時代の新しい民 (21~22) G. シオンの救いの福音 (xi) 1. 一詩連: 福音告知者 (1~3) 2. 二詩連: 回復と繁栄 (4~5) 3. 三詩連: シオンの卓越性 (6~7) 4. 四詩連: 永遠の契約の民 (8~9) 5. 五詩連: 感謝の歌 (10~11)	6. 六詩連: 新創造と新しい時代 (17~19) 7. 七詩連: キリスト的社会的な生活 (20~23) 10. 十詩連: 平和の時代 (24~25) L. シオンの新誕生と審判の火 (xvi) (1~16) 1. 一詩連: 霊と真にすべき礼拝 (1~2) 2. 二詩連: 114の禁戒の腐敗 (3~4) 3. 三詩連: 町の響きの叫び (5~6) 4. 四詩連: 新しい民の誕生 (7~9) 5. 五詩連: キリスト時代の恵と豊かす (10~11) 6. 六詩連: 繁栄と慰め (12~14) 7. 七詩連: 主は地を踏む (15~16)
F. イスラエルの怒め (liv) 1. 一詩連: シオンの多くの子 (1~3) 2. 二詩連: 主はイスラエルの父 (4~5) 3. 三詩連: 永久の憐れみと献身 (6~8) 4. 四詩連: 永遠の契約 (9~10) 5. 五詩連: 新エルサレム (11~15) 6. 六詩連: 主の全能 (16~17) G. 見顧みられた (lv)	C. 執念深い恵み (vii: 14~21) 1. 序曲: 救いの時に痛む (14) 2. 一詩連: 神の住居 (15) 3. 二詩連: 審判の時を終わらす (16~17) 4. 三詩連: 叫び、騒め、賛美 (18~19) 5. 結: 悪人 (20~21)	H. キリヤの民 (xii) 1. 一詩連: 美の母 (1~3) 2. 二詩連: 新契約の結婚 (4~5) 3. 三詩連: シオンの破壊の見證人 (6~7) 4. 四詩連: シオンの幸福 (8~9) 5. 五詩連: キリヤの民 (10~12)	M. 終末論的要約 (xvi: 17~24)
1. 一詩連: 神の響きの杯 (li: 17~18) 2. 二詩連: エルサレムの破壊状態 (li: 19~20) 3. 三詩連: 怒りの杯 (li: 21~23) 4. 四詩連: 起きよエルサレム (lii: 1~2)	D. 神に在りし礼拝 (lviii) 1. 一詩連: 予言者への呼びかけ (1~3b) 2. 二詩連: シオンの断食 (3c~5) 3. 三詩連: 真の断食への報い (6~9b) 4. 四詩連: 神と約束 (10c~12) 5. 五詩連: 安息日を守れ (13~14)	I. 黙しの年 (xiii: 1~6) 1. 一詩連: エドム及びの征服者 (1) 2. 二詩連: 酒舟を踏む者 (2~3) 3. 三詩連: 報復の日 (4~6)	
6. 六詩連: 汝の神は王となつた (lii: 7~8) 7. 七詩連: 怒め、騒い、勝利 (lii: 9~10) 8. 結: 新しい出エジプト (lii: 11~12)	E. 神の介入 (lix) 1. 一詩連: 神と社会の分離 (1~4) 2. 二詩連: 悪人の曲がった道 (5~8) 3. 三詩連: 共同体の歎き (9~11) 4. 四詩連: 共同体の告白 (12~15b) 5. 五詩連: 神介入の救済 (15c~17) 6. 六詩連: 黙しの神守り (18~21)	J. 予言者の執成し祈 (xiii: 7~xiv: 12) 1. 一詩連: イスラエルの憐れみと響き (xiii: 7~10) 2. 二詩連: 昔日の不思議 (11~14) 3. 三詩連: 4人の父、贖主 (15~16) 4. 四詩連: 帰れ (17~19) 5. 五詩連: 世界的神靈の祈 (xiv: 1~5b) 6. 六詩連: 罪の告白 (5c~7) 7. 七詩連: 最後の祈願 (8~12)	
F. イスラエルの怒め (liv) 1. 一詩連: シオンの多くの子 (1~3) 2. 二詩連: 主はイスラエルの父 (4~5) 3. 三詩連: 永久の憐れみと献身 (6~8) 4. 四詩連: 永遠の契約 (9~10) 5. 五詩連: 新エルサレム (11~15) 6. 六詩連: 主の全能 (16~17) G. 見顧みられた (lv)	F. 衆人の主の栄光 (lx) 1. 一詩連: 衆人の栄光の夜明け (1~3) 2. 二詩連: 國々の富 (4~5) 3. 三詩連: 東方の貢 (6~7)	K. 衆人と救い (lxv) 1. 一詩連: 主は世に (1~2) 2. 二詩連: 痛めた迷信的禁戒 (3~5) 3. 三詩連: 神の響きの鐘 (6~7)	
[III] 伊テ lvii~lxvi (六三イサヤ) A. 予言者の教え (lvi: 1~8) 1. 序曲: 律法に従え (1) 2. 一詩連: 祝福と勧め (2~3) 3. 二詩連: 審判 (4~5)			

- ① 創造の整理 xli: 12~17, 21~24, 26, 27, xlii: 18~20, xliii: 5, xliiii: 7, 12, 15~19, xlviii: 13, li: 9~16
1. 人物の連続性 (xli: 22, xlv: 12, 18)
 2. 125211 (xliiii: 1, 15, 21, xlv: 2, 21, xlv: 11, liii: 5)
 11. = 125211 (xliiii: 2, 16~17, xlviii: 21, li: 9~10)
 12. 125211 (xlv: 7), 125211 (liii: 16) — 連続性

- ② 歴史 xli: 2~4, 22~24, 25~28, xlii: 9, xliiii: 18~19, xliiii: 6~8, 26~28, xlv: 1~6, 13, 21, xlv: 8~11, xlviii: 3~11, 14~16, li: 1~3
- 歴史の連続性の断片性。断片の連続性 (③参照)

- ③ 対偶象 xli: 18~20, xlii: 24, 29, xliii: 8, 17, xliiii: 9~20, xlv: 16, 20, xlv: 1~2, 5~7, xlviii: 5
1. 象の連続性
 2. 断片能力, 断片能力

- ④ 契約 1. 125211 (liii: 9~10)
2. 125211 (lv: 3)
3. 125211 (xlii: 6, xlix: 8)

- ⑤ 文中の「文の連続性」
1. 「文の連続性」= ① xlii: 1~9, ② xlix: 1~6, ③ li: 4~9, ④ liii: 13~liii: 12

125211	125211
連続性 xlii: 1	xli: 8~9, xliiii: 10, xlv: 1
断片性 xlix: 6	xlii: 6, li: 4, xlv: 4
断片内 xlix: 1	xlv: 2, 24, xliiii: 1
断片外 xlix: 1	xliiii: 1

2. 断片

- 125211 (S. Mowinkel, Seinecke)
125211 (Marti, Ewald, Hölscher)
125211 (B. Dahm, xlv: 14, xlix: 12 u. 13)
125211 (Volz, Eissfeldt, Fohrer)
xli ~ xlviii 125211, xlix ~ lv 12, 10247 (Küenen, Kitchel, Procksch)

3. 断片

- ① { xli ~ xlviii 125211 / 125211 断片
xlix ~ lv 125211, 断片及讨论 125211
125211 / 125211 断片
文中, 断片及讨论 断片 (Fohrer, North)

② 文中の断片 (B. Dahm)

- { 断片及讨论 xlii: 1~4, 5~7, xlix: 1~6, li: 4~9
断片及讨论 li: 10~11, liii: 13~liii: 12 (Fohrer)
断片及讨论 断片及讨论 断片及讨论 (Fohrer)

V. 断片 (vi ~ xvi) :-

1. 断片

- (1) xli ~ xlv = 断片 (E. König, D. Michel)
- (2) 断片中断片 125211 断片及讨论 断片及讨论 (Dahm)
- (3) 断片及讨论 断片及讨论 (Budde, Volz, Eissfeldt, Weiser, Mühlentburg, Fohrer)

2. 断片 = 断片及讨论

- (1) 断片 = 断片及讨论 断片及讨论
- (2) 断片及讨论 断片及讨论 断片及讨论 (断片及讨论 断片及讨论)

- (3) 先知书, 希望书, 先知书, 先知书
 - ① 先知书 (Ivi: 9~)
 - ② 得蒙礼拜 (Ivii: 3~ , Ixv: 1~), 宗教混淆 (Ixxvi: 3~)
 - ③ 断食 (Iviii: 1~7)
- (4) 先知书的年代: a 期待 (Ix: 5-14, Ixi: 4-7, Ixii: 8-9, Ixv: 19-24, Ixxvi: 10-12)
- (5) 「读」 「读」 "先知书" (先知书之先知书) "先知书" 先知书
- (6) 先知书的年代与先知书

3. 法錄集

	Muilenburg	Fohrer
Ivi: 1~8	Bc 530~510	Bc 5c. 初
Ivi: 9~ Ivii: 13	530~500	"
Ivii: 14~21	先知书	先知书
Iviii: 1~12	538~520	"
Iviii: 13~14		"
Iix: 1~4, 5~8, 9~15a, 15b~20	"	5c. 初
Ix	先知书的第3章 先知书	先知书
Ixi		
Ixii		
Ixiii: 1~6	(先知书与先知书)	先知书
Ixiii: 7~ Ixiv: 11		
Ixv	538~520	4c. (520)
Ixvi: 1~4 (1~16)	(先知书与先知书)	
Ixvi: 5~24 (17~24)	(先知书与先知书)	3c.

VI. 先知书内的先知书:—

- 1. 先知书的先知书 (Ixi: 1~24) (xiii~xxiii)
先知书与先知书
- 2. 先知书的先知书 (xxiv~xxvii) 先知书

- 3. 先知书的先知书 (xxxiii)
先知书的先知书 (xxxiv~xxxv) } 先知书
- 4. 先知书的先知书 (xxxvi~xxxix) — 先知书的先知书

VII. 先知书的结构:—

- 1. i~xii 先知书的先知书
xiii~xxiii 先知书的先知书
xxiv~xxxv 先知书的先知书
xxxvi~xxxix 先知书的先知书
xl~lv 先知书的先知书
lvi~lxvi 先知书的先知书

2. W. H. Brownlee: The Meaning of the Qumran Scrolls for the Bible, pp. 247 ff. (1964)

R. K. Harrison: Introduction to the O.T. (1969) p. 788
The International Standard Bible Encyclopedia, fully revised, vol. 2 (1982) ISAIAH p. 800

	前半	后半
先知书的先知书	1~v	xxxiv~xxxv
先知书的先知书	vi~viii	xxxvi~xl
先知书的先知书	ix~xi	xli~xlv
先知书的先知书	xiii~xxiii	xlvi~xlviii
先知书的先知书	xxiv~xxvii	xlix~lv
先知书的先知书	xxviii~xxxi	lvi~lix
先知书的先知书	xxxii~xxxiii	lx~lxvi

から、「この島に住む民」と読むこともできる。それに「島」には「ハ」というヘブル語定冠詞がついているから、当然、これを固有名詞と解釈し、特定の場所を指していると解釈する人がいても不思議ではない。さらに、「この島」は単数の名詞であるから、特定の一国を推定することさえできる。だから、注解に当たって、「この島」をユダ国と理解する人もでてくる。もちろん、ユダは島ではない。だが、それが特異な地域であることは、だれの目にもよく了解されるであろう。

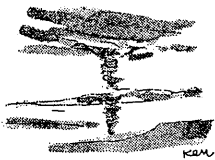
ただし、「この島」を普通名詞として受けとり、協会訳のように「この海辺に住む民」と訳すことももちろん可能である。前述したように、海辺という名詞が単数であるから、それを嚴格に解釈すれば、この海辺はペリシテを指し、六節の詠嘆はペリシテ人が口にしたことになる。だが、協会訳がそのニュアンスをよく伝えているように、これは反アッスリヤ同盟を結成したエドムやモアブ、ユダなどを包含したものと理解した方が自然であろう。これらの国々は己の才覚で事を運ぶのに夢中になりすぎ、イザヤの象徴預言、それはだれにでも理解できるはずであり、いやでも人目につくはずであったにもかかわらず、これに耳を傾けようとしなかったからこそ、このような悲惨な運命に遭遇することになるのである。

「われわれはどうしてのがれることができようか」の「われわれ」という箇所には、わざわざ強意の一人称複数代名詞が挿入されている。ペリシテのアシドドをはじめとしたパレスチナの諸国の民が「われわれ」なのである。反アッスリヤ同盟をデッチあげた彼らであったが、彼らは自分たちの力量ではどうもアッスリヤに対抗できるとは考えていなかった。彼らは新興勢力であるエジプトの力をあてにして、やっと起つことができたのである。大きな傘であるエジプトの庇護を求めて、事をはじめたのである。エジプトが強大でなかったら、彼らはそんなことを当然しなかったであろう。とこ

ろが、彼らが十分アッスリヤに対抗できると思い込んでいた強大なエジプトが破綻してしまおうというのが預言のメッセージであった。彼らが特別に強大であると信じ込んでいた巨大な傘が破れるというのである。エジプトさえそうであるならば、自分たちの運命は言うまでもないことである。自分たちには逃がれる術が今やない。進退極まるという事である。

かくて、ユダの民は審判をまともに受けなければならぬ立場に立たせられることになる。それがユダの定めなのである。

(日本基督教団金沢南部教会牧師)



イザヤ書第二二章一—一〇節

—海の荒野についての託宣

新約聖書と違って旧約聖書の各書物は、表題や書き出しの著者名が必ずしも現在の形のその書物全体を包んでいないということが、まま見受けられます(詩篇七二・二〇、箴言三〇・一、三一・一、エレミヤ書五一・六四など参照)。それで、「アモツの子イザヤが見た幻」と書き出されていても(イザヤ書一・一、二・一、一三・一)、それがどこまでを包む表題なのかは、判断とれません。とり

榎原康夫

わけ、イザヤ書第一三章以下第三五章までの部分は、内容的にも様式から考えても雑多な預言が寄せ集められている所ですから、一つの単元ごとに背景や主題や年代を推測して冥想するほかありません。

「海の荒野(についで)の託宣」とは謎めいた表題です。言葉の矛盾ですから、多くの臆測がなされました。七十人訳「荒野の託

宣、クムラン写本「ことばの託宣」という古い異説に励まされて、本文修正も企てられてきました。託宣本文にある「荒野から」という句による見出しであると考えるのもその一つですが、バビロニアを表わすアツカド語「マト・タムテイ」（海の土地）に引掛けた「海のほとりの荒野（平地）」バビロニアに関する託宣である、と解釈する翻訳聖書もあります。前者では、「荒野」は「恐るべき地」「エラム」「メデア」地方をさすことになり（二二・一一―一二）、おそらく、「ドマ（沈黙）」（二二・一一）、「幻の谷」（二二・一一）、「アリエル（神の炉）」（二九・一一）、「ネゲブの獣」（三〇・六）と同じように象徴的な、バビロンをさす表題としておくのが、最も無難です。この曖昧な託宣が「バビロンが倒れた」こと（九節）を主題としていることは、数少ない確実な事の一つだからです。

結び（一〇節）において、預言者は「踏みじられたわが民、わが打ち場の子よ」を呼びかけます。「打ち場の子」という句は旧約中こしか出ませんが、打ち場で砕かれ風に吹き払われる者たちという意味でしょう。エレミヤ書第五一章三節の似た文ではバビロンを表わすので、ここでも預言者はバビロンに倒される運命を告げていると解釈（本文修正）する人もありますが、その必要も権利もありません。選民に語っているのですが、その選民は神の懲らしめに打ちのめされている状態なのです。「踏みじられたわが（民）」は女性単数形ですから、「わが踏みじられた娘」と訳すほうがよいかも知れません。これは最も自然には、哀歌に歌われた娘シオンの姿を思わせます。そうすると、この託宣は、バビロンによって聖都が蹂躪され捕囚として連れ去られている選民に、バビロンの崩壊（前五三九年）を告げるものである、と確認することができます。

名指す例はありません。歴史の事実としては、ペルシアとエラムの境にあるアンシャン王クロスが、メデアを併呑してからバビロンを取ったのです。

三四節は、この「きびしい幻」を示された預言者の反応を描く文ですから後述することとし、五節になお引き続き描かれる幻を学びましょう。五節全体を二節後半のようにカギ括弧に包んで呼びかけのせりふとする案もありますが、多くの翻訳聖書は、五節前半は宴会の描写、後半はそのさなかに起こる命令の叫び、と解しています。それは、歴史の事実として、バビロンが宴会中に敵に襲われて破れたという事実があるからです（ダニエル書五・三〇―三二）。

「キユロスは次のような作戦に出たのである。軍の主力を河が（バビロンの）町へ流れ込む流入部のところへ配置し、また別隊を町の背後の河が町から流れ出るあたりにも置き、河が徒渉できると見たら、河を渡って町へ侵入せよと指令しておいた。……後、自分は非戦闘部隊とともに引き上げていったが、例の湖のところにへゆくと、かつてバビロンの女王が河と湖を使ってしたのと全く同じことを、もう一度繰り返してしたのである。すなわち運河によって河の流れを沼になっている湖に導入し、河の水が退いて元の流れが歩いて渡れるようにしたのである。……その作戦のために配置されていたペルシア軍は、水が退いて腰の中程辺りまでの深さになったユーフラテス河を渡って、バビロン市内に突入した。……土地の住人の話によれば、町が広大であるために、バビロンの町の末端の住人が既に敵の手に落ちたのに、中央部に住むものたちはそのことを知らず、たまたまその日は祭の日に当たっていたので、その時刻には踊り狂い飲めや歌えの大騒ぎの最中で、その挙句ことの真相をいやというほど知らされたのだということである」（ヘロドトス『歴史』一巻一九一、松平千秋訳）。

時のバビロン王ナボニドスの年代記も、バビロンが戦わずしてクロ

きびしい幻（一―五節）

「つむじ風」についてはO・カイザーの註解（ATD）の注に生しい体験者記録の引用があります（邦訳二一九ページ）。パレスチナ南方の砂漠「ネゲブ」で吹き荒れるこの「つむじ風」は、「きびしい幻を示された」（二節）にかかるとはなく、「荒野から、来るもの」にかかります。どの方角から何が来るのか、まだ明らかにされません。

「かすめ奪う」（二節）は裏切りを働く、欺く、という意味の言葉ですが、「滅ぼす」と組み合わされて、広く掠奪・暴虐を表わすのでしよう（三三・一二）。これがだれの行為をさすのか、意見が分かれます。（一）イスラエル人に対するバビロンの暴虐、（二）バビロンに対するエラム・メデアの暴虐、（三）受身形に修正して「かすめ奪う者はかすめ奪われる」というバビロンの受ける同態復讐（三三・一、エレミヤ書五一・一一、二五参照）。私はこの文脈のこの段落では、つむじ風のようなエラム・メデアの姿、と取るのがよいと思います。「エラムよ」と「のほれ」とには洒落があります。「わたしはすべての嘆きをやめさせる」は神の宣言です。従って、「エラムよ」以下二行を引用カギ括弧で包むとよいでしょう。ここで初めて「来るもの」の正体が明かされます。バビロンの東、ペルシア湾沿いに「エラム」が、その北方に「メデア」があり、エラムの更に東、ペルシア湾沿いにペルシアが広がっていました。エラムの都はササ（ダニエル書八・二）、メデアの都はアクメサ（エクバタナ）です（エズラ記六・二）。バビロンを倒す勢力は北からの（エレミヤ書五〇・九、四一、五一・四八）メデアであるとする預言が普通で（二三・一七、エレミヤ書五一・一一、二八）、エラム（エレミヤ書二五・二五、四九・三四以下、エゼキエル書三二・二四以下）を

スの手に下った事実を認めています――

「ダシュリツ月に、クロスがチグリシ河畔オピスにいるアツカド軍を攻撃した時、アツカドの住民が反逆したが、彼（ナボニドス）は混乱した住民を虐殺した。第十四日シッパルは戦闘なしにとられた。ナボニドスは逃げた。第十六日グティウム総督ゴブリアス（ウグバル）とクロスの軍は、戦闘なしにバビロンに入った。後にナボニドスは、バビロンに帰ったところを捕えられた。その月の末まで、楯を帯びたグティ人たちがエサギラに駐屯していたが、エサギラとその建物の中ではだれも武器を携帯せず、（祭儀の）正しい時機も逸しなかった。アラシャムヌ月第三日にクロスはバビロンに入った。緑の若枝がその前に広げられた――平和の状態が都に与えられた。クロスは全バビロンに挨拶を送った。彼の総督ゴブリアスがバビロンに（下級）総督を任じた。キスリム月からアダル月までの間、ナボニドスがバビロンへ連れて来ていたアツカドの神々がそれぞれ聖なる町へ帰った」。

「盾に油をぬる」のは、革ばりの盾をみがくため（アリストパネス『アカルナイの人々』一一二八行）、敵の攻撃（矢）を避けるため（MLB脚注）、などと想像されてきました。とにかく戦いの身支度の一つなのでしょう（サムエル記下二・二二）。

見張びと（六一―九節）

託宣の第一幕「きびしい幻」では、攻め寄せる軍勢がエラムとメデアであることが明かされましたが、攻められるのがどこであるのかは、告げられていませんでした。第二幕「見張びと」の中で、それが「バビロン」であることが、初めて明かされます（九節）。また、第一幕では宴会のさなかに押っ取り刀で戦いに身を投ずる狼狽ぶりが描かれながら、その結果はわかりませんでした。第二幕で初

めて、「倒れた」ことが報告されます。このように、肝心の落城の場面は隠されていて、前と後からだけ語るといふ巧みな技法がこらされていきます。謎めいた表題といい、間接的に指さす証言法といい、読者の注意をクライマックスまでひきつけて離しません。

預言者を「見張び」というのは旧約の伝統です(ホセア書九・八、エレミヤ書六・一七、エゼキエル書三・一七、ハバクク書二・一など)。しかしここでは「わたし」が「見張びと」を置くのですから、別の者のように思えるところから、預言者の啓示受領の様態について、恍惚の中で自己を抜け出した外なるエゴが語られている、などと言われてきました。モファット訳「あなたの霊を見張台におけ」参照。しかし、「ひねもす」「夜もすがら」(八節)は複数の昼夜という長期間の見張を表わし、エクスタシーらしくありません。むしろ全体が幻の中のことであり、預言者の心理過程を知る手掛りにはならないでしょう。エレミヤ書第四八章一八一―二〇節参照。

「その時、見張びとは」(八節)という句は、「獅子が」という原文の修正です(クムラン写本による)。この「呼ばわ」りが、八節で終わるか(JPSV、JB、GNB、モファット)、九節一行目まで続くか(RV、MLB、バルバロ訳)、九節全体も含むか(新改訳、NAB、NIV)、解釈が分かれますが、口語訳通りが無難でしょう。

もう一つの問題は、「馬に乗って二列に並んだ者と、ろばに乗った者と、らくだに乗った者」(七節)と「馬に乗って二列に並んだ者」(九節)とが、同じ隊列のことか別の隊列のことか、という問題です。それと絡んで、七節の隊列は、進軍して行く軍隊か、がいせんする行進か、解放されて出てきたキャラバンか、全く無関係な通商キャラバンでただ世界の情報をもたらしてくれるだけなのか、という点も問題になってきました。このような意見が分かれる理由

二ページに訳出されています(キュロス円筒碑文二二―三三行)。

わが心はみだれ惑う(三一―四節)

ここまでで明らかにになったように、この託宣は前五三九年のバビロン投降の史実と違う所があります。(一)バビロンをとったのはエラムとメデアでなく「ペルシア帝国」のクロス王でした。(二)バビロンは戦闘せずにとられました。(三)バビロンの神々に砕かれませんでした。そこで、この託宣は事後預言ではなく、まさしくアモツの子イザヤによる予告である、という保守的な主張がなされ、その場合、前七一〇年アッスリヤ王サルゴン二世によるバビロン占領をさしていると考えられます。確かに「前七〇九年のバビロン破壊に関するサルゴン自身の記事にはイザヤ書第二三章一―二二節と多くの共通点がある」ようです。

しかし、これではまた、(一)「エラム」「メデア」の攻撃が合致しませんし、(二)バビロンの神々が砕かれた形跡もありません。サルゴンはむしろ前七一〇年新年祭にマルドゥクの手をとって「マルドゥクの摂政」と名乗ったほどですから。(三)むしろ選民は「打ち場の子」と呼ばれる状態になっていませんでした。そこで、多くの批評家は、バビロン捕囚中、バビロンの衰微の気配の感じられ出した頃、前五三九年の少し前の予告であろう、とも考えてきました。

さて、このような読み方そのものに、少し無理がありはしないでしょうか。私は子供のころ南京陥落とか関東大震災のことを聞いていました。南京大虐殺や関東在朝鮮人虐殺などがあつたことは戦後おとなになってやっと知ることができました。同じように、バビロンが陥落したことを知っても、それが無血入城であつたとか偶像破壊が行なわれなかつたとかを事細かに世界中の人が知るわけはありません。預言者は伝統的な慣用語をもって「バビロンは倒れ

に、「ろば」「らくだ」も混じっている事実が挙げられます。そこで、少なくとも古代において、これらは立派な戦闘要員であつたことだけは、知っておく必要があります。クロス軍隊は、馬がらくだを恐れるというので積極的にならぬを活用して、リデアのクロイソス王の軍を破りました(ヘロドトス『歴史』一・八〇)。ペルシアのダリヨス王も、ろばとらばの鳴き声と姿でスクテア軍の騎兵隊を混乱に陥れました(同四・一一九)。スリヤのアンテオロス三世の軍には象軍もらくだ隊もありました(リヴィウス『ローマ史』三七・四〇)。ペルシア湾沿いのカルマニア人は、馬が少ないので戦争にろばを使いました(ストラボン『地誌』一五・二一―二四)。ですから、私は、七節も九節もバビロンを倒して帰ってくる軍列のことだろうと思います。

「彼は答えて言った」(九節)の「彼」についても、「わが霊」(モファット訳)、「見張びと」(GNB、MLB)、「隊列の人」(新改訳、バルバロ訳、NAB、NIV)などと想像されていますが、「主」(六節)なる神御自身をとるのが最も無難です。結論的に言って、「イスラエルの神、万軍の主からわたしが聞いたところのもの」(一一節)は、この「倒れた、バビロンは倒れた……」という答えにほかならないのですから。

バビロンが「倒れた、倒れた」(九節)というのは、勇者の死をいたむ哀歌です(サムエル記下一・一八、エレミヤ書五一・八)。「その神々の像」が砕かれたのは、第四六章一―二節、エレミヤ書第五〇章二節、第五一章八、四七、五二節などにも共通の事項です。

ただし、歴史の事実としては、先に引用した『ナボニドス年代記』も証言するように、ペルシア王クロスは、征服した国々の神々を尊んで各々の聖所に帰らせ安置させましたし、バビロンの神マルドゥクたちとて同じく丁重に扱われたのでした。それを証言するクロス自身の文の一部が関谷定夫『図説…旧約聖書の考古学』二二―二六頁「ことを告知しているのです。むしろ重要な事は、この託宣は、だから選民に何を教えようとしているのか、という使信の役割です。伝統的な預言者の敵国滅亡預言は、嘲りの歌(一四・四)や悲しみの歌(エゼキエル書二六・一七など)をもって、かつて無敵を誇った巨大な権力と富とがその高ぶりを罰せられて倒れたことを語ります。神の正義の立証、しいたげられた選民の解放が歌われます。第三章―第四章二三節のバビロン滅亡預言はそれらの要素を備えていました。「海の荒野の託宣」にはそれらが欠けているのが、大きな特色です。

「きびしい幻」のゆえに預言者が腰の激痛(三節)と心の恐怖(四節)を語るのも、例のないことです。通常は、恐るべき運命の到来を語ると共に、泣く者と共に泣くように語るものです(一六・九、一一)。それは、相手に臨む審判がいかに恐るべきものであるかを強調する技巧であるともいえます。ところが、ここでは、まだどこの国にエラム・メデア連合軍が攻め上るのかも明かされず、戦いの結果もわからぬうちから、預言者は不可解なほどの戦慄に陥るのです。これに類する反応はダニエルにあるだけでしょう(ダニエル書四・一九、七・一五、二八、八・二七、一〇・八、一六)。

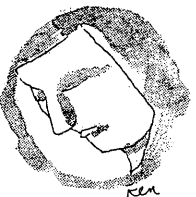
ですから、この託宣は、バビロン捕囚中の選民に、圧迫者バビロンが神の審判に会って倒されることを告げて慰める、いわゆる第二イザヤの使信とは違います。むしろ、「バビロン」に象徴される世界帝国が倒れ世の神々の権威が失墜し世の秩序が転覆する恐るべき出来事を告知しているのです。ヨハネの黙示録がこの託宣を借りて、「倒れた、大いなるバビロンは倒れた」と終末的な出来事を描くのは、適切なことです。

旧約歴史書から推して悪しき王だと思われるユダ王国末期の王でさえ、失われてみると、「われわれが鼻の息とたのんだ者」「異邦人の中でもその陰に生きるであろう」と思った者」といわ

れます(哀歌四・二〇)。どんなに無信心な王でも、庶民にとって
は、やはり一応の治安が保たれる安全保障である限り、いないより
はいてほしかったのです。バビロンもまた、たとえ捕囚の身になっ
ても地上の平和と秩序の保障でした(エレミヤ書二九・四―九、第
一テモテ二・一―二)。それが倒れても微動だにせぬ抛り所を、私
たちはどこに見出しているのでしょうか。
バビロンの神々の像が打ち砕かれたというのは、世界秩序を支配
していると信じられたこの世の力が、結局は人間製の偶像にすぎな
いことを暴露されてさばかれる、ということにはほかなりません。出
エジプト記においてエジプトの神々をさばいたといわれるヤハウェ
は(出エジプト記一二・二二)、「ここで最終的に、この世の神々を
全面的に打ち砕かれます。ですからこの神を、「主、アゾーナーイ」
(六節)、「イスラエルの神、万軍の主(ヤハウェ)」(一〇節)とい
う最高の呼び名で表現しています。
「主は全地の王となられる。その日には、主ひとり、その名一つ
のみとなる」(ゼカリヤ書一四・九)。

注

- (1) The Moffatt Translation of the Bible, Verlag der Zwingli-
Bibel Zürich 1964.
- (2) The Jerusalem Bible, The New American Bible, The New
International Version. ハンツヤ書五一・一三参照。
- (3) The Jewish Publication Society Version や モノマニア訳は、
「かすめ奪う者は」以下を括弧で包む。
- (4) モノマニア訳、The Good News Bible は特に生々しい。
- (5) So called Nabonidus-Chronicle iii (Ancient Near Eastern
Texts relating to the O. T., p. 306 b)
- (6) Gustav Höltscher: Die Profeten, 1914 以来。



《ことばの意味》 祈り

はじめに

プロテスタント教会において、教会とは何かとの定義は、「福音
が純粋に教えられ、聖礼典が福音に従って正しく執行せられるので
ある」(アウグスブルク信仰告白より)と言われる。しかしこのプ
ロテスタントの教会観にも原因して教会に片寄りが生じた。即ちそ
こでは言葉が重んじられ、教会は聞く教会にとどまり、祈りとして
応答して行く面の軽視にいつの間にか陥って行ったのである。ハイ
デルベルク信仰問答の第三部感謝について、問一一六「キリスト者
には、何故、祈りが必要なのですか」。答「それは、祈りが、神が
われわれにお求めになる感謝の最もすぐれたものであり……」とあ
る。即ちみ言葉を聞いてその応答の中心部分、そこで求められる感
謝の第一が祈りなのである。信仰生活は呼吸にたとえられる。信じ
ることは吸いこむことであるがそれだけでは半分である。吸いこめ
ば、必ず心持ちよき呼吸がともなう如く、キリスト者は信じて祈るこ
とにより生きるのである。即ち説教を聞いて礼拝に出席していると
いうだけの受身にとどまっているなら、遂に信仰をすら失ってしま

- (7) The Modern Language Bible=The New Berkeley Version
- (8) J B 注参照。日本語では『新聖書注解』イザヤ書(鍋谷義爾)
など。
- (9) D. J. Wiseman: Babylonia (The International Standard
Bible Encyclopedia, fully revised, p. 394)
- (10) D. J. Wiseman: Babylon (op.cit. p. 385)
- (11) 「出産に臨む女の苦しみのような苦しみ」は一三・八、エレミ
ヤ書六・二四、三〇・六、「腰は激しい痛みで満たされる」はナ
ホム書二・一〇参照。「たそがれ」は「日の涼しい風の吹くこ
ろ」(創世記三・八)として「あこがれた」時。
(日本基督教改革派教会・東京恩龍教会牧師)

山岡善郎

うであろう。私たちは祈らねばならない。祈りによって私が事実、
神を信じていることを表わすのである。

祈りの源泉、イエスの祈り

原始教会は旧約以来の祈りの伝統の中にある。が原始教会の祈り
の決定的な力と源泉はイエスの祈りにあるということが出来る。即
ちイエスの祈りに学び、それに触発されて、弟子たちは祈り、初代
のキリスト者は祈るのである。イエスは彼のバプテスマの時に祈り
(ルカ三・二一)、しばしば人々から離れて一人祈り(マルコ一
三五、六・四六)、弟子たちや群衆を前にして祈る(マルコ六・四
一)。また十字架上で祈ったのである(ルカ二三・三四、四六、マ
ルコ一五・三四等)。そこでイエスの祈りの中で典型的なものの一
つ、ゲッセマネの祈りをかえりみる。「アバ、父よ、あなたには、
できないことはありません。どうか、この杯をわたしから取りのけ
てください。……」(マルコ一四・三六)。この「アバ、父よ」
Abba の名称のアバはイエスが使用されていたアラム語で幼児が
父に呼びかける言葉「お父さん」である。しかしこの語の祈りへの